

# 大震災後：日本のチカラを再評価する

Post-Earthquake-Disaster Era: Reevaluation of Japan's Capability

三菱UFJリサーチ&コンサルティングでは、2010年度より、弊社の研究員およびコンサルタントの基礎的教養を高め、クライアントに対してより魅力的で洞察力のある知恵の提供ができるようになることを目的に、「学び」の場として『巖流塾』を開催しています。

この目的を達成するため、『巖流塾』では表面的な知識やスキルを習得する場所としてではなく、物事の実体、本質に迫ることができるようなテーマを用意し、自己鍛錬、塾生同士の相互研鑽の場を提供することを目指しています。

2011年度においては、『巖流塾』の活動テーマを「東日本大震災後の日本」と設定し、歴史的視点から日本文明のあるべき姿について塾生同士がそれぞれの専門分野における知見を持ち寄りながら、今後のあるべき日本の姿を構想していくことを目指しています。

そして、外部から有識者を講師としてお招きして、「東日本大震災後の日本」というテーマについて、有識者の方々とのディスカッションを軸に、あるべき日本の姿についての検討を進めることとしています。

お招きする有識者の第二弾として、埼玉大学名誉教授・長谷川三千子氏に、「大震災後：日本のチカラを再評価する」と題した講義をお願いいたしましたので、ここに講義録を採録いたします。



Since 2010, Mitsubishi UFJ Research and Consulting has offered the company's researchers and consultants learning opportunities through the Ganryu Seminar to enhance their basic knowledge and enable them to provide interesting and insightful ideas to clients. To achieve this goal, the Ganryu Seminar is intended to be not merely a place for acquiring superficial knowledge or skills, but also a place where the participants can learn from each other as well as train themselves by engaging in themes that are connected to the reality and essence of issues.

In 2011, the theme for the Ganryu Seminar is "Japan after the Great East Japan Earthquake," and participants will discuss what the Japanese civilization should look like from a historical standpoint and create an ideal picture of the future of Japan by sharing their specialized knowledge in discussions. Also, experts from outside the company have been invited to lecture, and the seminar participants can further their ideas about an ideal Japan through discussions with them on Japan after the Great East Japan Earthquake.

Included in this issue of the journal is content from a lecture entitled "Post-Earthquake-Disaster Era: Reevaluation of Japan's Capability", by Ms. Michiko Hasegawa, Professor emerita at Saitama University, who was the second invited lecturer at the Seminar.

## はじめに：「幸福」について考えるということ

「幸福」というものについて考えるにあたって、まず考えてみたいことは、はたして社会全体の幸せなんていうことは考えられるのでしょうか、ということです。

たとえば社会の中にはイカが好きな人もいる一方で、イカが大嫌いな人もいるわけですから、もしも社会のみんながイカをたくさん食べられるようにした場合、幸せになる人もいるし、不幸せになる人もいるわけです。では、社会全体の幸福ということを考えることはそもそもナンセンスなのでしょうか。

哲学者の中島義道さんは、哲学の立場から、「社会全体の幸福ということを考えることは徹底してナンセンスである」と考えているのです。彼が何で「ナンセンス」と考えているかということ、「だって、どうせみんな死んじゃうじゃないですか」ということなのです。それが彼の哲学の根本なのです。つまり、どんなにいい社会を築き上げ、どんなにおのおのの志を遂げ、どんなに高い地位になり、自分の欲望を満足させても、どうせみんな死んじゃう、という考え方なのです。別の視点から考えて、時間を少し広げて言えば、宇宙全体の長さから比べたら人類が登場して人類が減るまでの時間は、ほんの一瞬みたいなものではないでしょうか。そう考えたら、「もうすべてはむなしい」ということが、中島義道さんのつい先日ごろまでの哲学です。

つい最近もらった彼の新著『明るいニヒリズム』（PHP、2011）を読むと、彼はそこからもう一段ぼんと飛躍して、「でも今を生きることが大事だ」という、どうやらそういう悟りの境地に達したようです。以前から彼はいずれ悟りの境地に多分達するだろうなと思っていたら、思ったとおりに達したので、ちょっとした嫌がらせみたいに、「思ったとおりに、おまえ、悟ったな」という内容の礼状を書こうと思っているところです。

いずれにしても、非常にひねくれた哲学者の目から見れば、「社会全体の幸福なんていうものは、どうせ人類は死んじゃうのだから所詮はむなしいもの」となってしまう

わけです。しかし一方で、宇宙の中の小さい地球に人類が生まれて、その歴史をもって、そしていずれ滅んでいくからには、その中で社会全体の幸福をいかにして達成できるのか、ということについて人間が一生懸命考えるということは、これはむなしいどころではない、ナンセンスどころではない、非常に大事なことだと思うのです。

同時に、これを日本の伝統思想というものとどう結びつけて考えたらいいのかということも私は非常に重要なテーマではないか、という気がするのです。

ただし、どういう位置から社会全体の幸福を考えたらいいのか、という点はとても難しい問題です。この問題については、社会の中にお手本になるものというのがあるにしろ少ないのです。

## 仁徳天皇のエピソード

ところが、実は日本の最も伝統的な歴史書であり、神話の書であり、かつ政治道徳の書である「古事記」と「日本書紀」を眺めると、「社会全体の幸福を達成することが一番の大きな目的である」という政治思想が日本の政治道徳の伝統においてははっきりと出ているのです。

殊にその中でも「日本書紀」においてその意識が一番はっきりしているのです。具体的には、仁徳天皇が丘の上に登って民は幸せであるかどうかと見回したら、民のいおりから煙が立ち上っていなかった、というエピソードですが、これは多分皆さんも学校などいろんなところで聞いたりして、おなじみだろうと思います。これは「古事記」にも似たような話が出てくるのですが、「日本書紀」ではそれを非常にクローズアップして、大事なエピソードとして書いています。

どういう話かということ、仁徳天皇が即位したのですけれども、どうも民のみんなが何かしょぼんとして元気がなく、即位をほむる声が聞こえない。それでどうしたのかなと思って高い丘の上に登って眺めてみたら、民のいおりから煙が全然立ち上っていない、というわけなんです。

これは排気対策がよく行き届いていて結構だ、という話ではもちろんなくて、当時は要するに食べ物なくて、

炊事の機会も減少してしまい、それで民のかまどから煙が立ち上がっていない、ということです。端的に言って民が飢えているという状態だということを仁徳天皇は理解したわけです。

じゃあどうしたらいいか、ということで仁徳天皇が実施したことは、3年間税を廃止するということでした。減税ではなくて、税の廃止です。要するに民がつくったものを天皇に納めるということを廃止して、自分でつくったものを供出しないで自分たちで食べてよいということです。それで3年間たって、仁徳天皇が高台にもう一度登って眺めたところ、民の家のどのかまどからも煙が立ち上がっていた、というエピソードなのです。これが仁徳天皇の善政のイメージの基本となっています。

「日本書紀」ではそのエピソードを描くだけでなく、さらにそれにいわば理論遍みみたいな形で仁徳天皇とお妃様の会話をつけ加えているのです。お妃様は仁徳天皇のやり方に対してちっとも喜ばないのですね。というのは、昔のことですから御殿の屋根を毎年葺かないと雨漏りをしてしまうわけですが、3年間も税を廃止したので、葺き替えもできず自分たちの御殿はぼろぼろで、雨漏りがして、雨が降ると歩かたびにすそが濡れてしまうのです。そこで「どうかかけてください、庭垣もぼろぼろです」とお妃様が訴えると、仁徳天皇は、「民の富めるは我の富めるなり」と答えるのです。民が富んでいるということが私が富んでいるということなのだ、と。「それ天の帝を立つるは民のためなり」。何で天皇なんていうものが立っているのかというと、それは要するに民のためなのだ、と。

後の大正時代に、「デモクラティア」という、もともと日本語にはない外来の言葉をどう訳そうかといったときに、政治学者の吉野作造がこれを「民本主義」と訳したのは、この仁徳天皇の「民がもと」だというエピソードから持ってきているのですね。つまり、民の幸せを基本に考える政治思想が「デモクラティア」である、というふうに理解したわけです。

これはある意味で美しき誤解だったわけで、実際は本当の「民主主義」というものは、根本には支配者対被支



配者のお互いの争いが基本にあり、「王を倒せ」という思想が「デモクラティア」の基本にあるのですが、それを日本流に美しく誤解すると、「民本主義」となったわけです。この「民本主義」というものはまさに「国体の本義」なのですね。

## 水戸学と「蒼生」

後の明治維新の直前に、「水戸学」がいわば明治維新の思想的バックボーンとなり、明治維新の志士たちに広く影響を与えました。この「水戸学」というものは、半分は漢学の流れを継いでいるのですけれども、単に中国の政治哲学を受け売りしていたわけではありませんでした。「水戸学」では、「古事記」や「日本書紀」という日本の古典をもう一度振り返って、「われわれ日本人の従うべき社会規範というのは何なのか、政治道徳は何なのか」ということを再発見しようとしたのです。

そして、「日本の国体において一番大事なものは何なのか」ということで取り出してきたものが、「蒼生」という言葉でした。これは要するに人民を“草”に例えているのですね。もっと古い日本語では「民草」という言い方もあります。つまり、天皇の務めは何かというと、「民の草を元気に生やすこと」「草をよく育てること」が天皇の仕事だという、そういう意味を込めて、「蒼生」とか「民草」という言葉が使われるのです。

そして、その「蒼生」を「安寧」に過ごせること、まさに社会全体の幸福を育てること、これが日本の古典を

振り返ってみると、わが国の国体の一番根本を形づくっている政治道徳であり、政治思想なのだ、ということを「水戸学」では言っているのです。

一般には、「水戸学」というと、専ら「尊皇攘夷」「夷狄を打ち払うべきである」という過激な排外思想の部分が強調された戦後伝えられているのですが、むしろ「水戸学」の一番の基本というものは、日本の古来の政治道徳思想をもう一度発見し直す、ということにあったのです。

たとえば、日本が元来外国の夷狄にどういふふうに対峙してきたかという、力でもって倒すのではないのです。「蒼生」「安寧」が基本となるわが国の国体というものは、世界じゅうどこに持っていてもみんなが感心するような普遍的な価値を持った政治道徳であり、夷狄たちもこういう「蒼生」「安寧」ということを軸にする国体を眺めると、「ああ、あれはすばらしい国だ」といって、それを尊敬し、それを倣うようになる、というわけです。つまり、外国と日本との関係はそういう関係でなくてはいけない、と「水戸学」は言っているのです。言ってみれば、国民の幸福というものは、日本の古来の政治道徳の中に語られた「蒼生」「安寧」という基本のラインをしっかり確保することにある、という考え方だと捉えていいかと思います。

## 民の持つチカラ

実は、「日本書紀」に出てくる仁徳天皇が語る「それ天のすめらぎを立つるは民のためなり」という考え方の基本は、中国の古典にある「堯風舜雨」<sup>ぎょうふうしゆんう</sup>から取り出されているのです。ただし、中国の古典の場合、そういう民の安寧を上から守る名君と、それに甘んじて、政治なんて自分には関係ないよといって、たっぷり食べて、遊興に興じて楽しんでいる民という、そういうリーダーと民というものの間が画然と離れているのですね。

ところが、日本人の場合、単にそうやってフォロワーに甘んじているのではなくて、蒼生自身の持つ力というのが日本の文化の中で非常に重んじられてきており、まさに国民性と言っていいものになっているのです。



それこそ下克上の戦国時代には、一介の水のみ百姓に生まれてもリーダーの資質がある人間はリーダーにのし上がっていく、という意味でそれが一番発揮された時代と言っていると思うのです。あるいは、支配者になるのではなくても、職人として名工と言われるような人間はそこで一家をなして、そしてすばらしい彫り物やすばらしい器をつくるという形で名前を残していくわけです。そしてそうした文化的蓄積が、明治維新のときには力を持ち、それで明治維新と文明開化が成り立ったのだということも言えるのですね。単純に「西洋文明に追随」という人もいますが、19世紀になってからの西洋の物質文明を、そうした素地の全くなかった別の文明が取り入れようといっても、実はものすごく大変なことなのですよね。実際にそれができたのは、19世紀の世界で日本一国だけだったと言ってもいいわけです。

なぜそれができたのかというと、これは日本人がとにかく新しいものに対する好奇心というのが非常に旺盛な民族であるということですね。それは戦国時代の鉄砲伝来のときにもすでに証明されたことでもあります。西洋人が鉄砲を持ちこんだ場合、日本以外の国ではびっくり仰天して、腰を抜かして、あるいはその鉄砲で退治されて滅んでしまったというような民族ばかりだった中で、日本に鉄砲を持ってきて、西洋人が20~30年たって戻ってきたら、日本じゅうで何万丁という鉄砲があふれていてびっくり仰天した、ということです。これが日本人という民族ですね。

## 「五箇条の御誓文」を読み解く

このことは、明治元年に明治天皇が公卿や諸侯などに示した明治政府の基本方針である『五箇条の御誓文』の第5番目「智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ」という、ことにかかわると同時に、第4番目の「旧来ノ陋習ヲ破リ」という項目にもかかわってきます。この「智識ヲ世界ニ求メ」、そして新しいものに好奇心を持って飛びつき、しかもそれを自分たちの手でつくってしまうという、これが日本人の本当に世界の中でも珍しい特色と言っていると思います。すでにこの「五箇条御誓文」ができて上がる以前に、いろいろと西洋人たちが日本に入ってくるわけですが、それらの至るところで日本人らしさが実現されているのです。

たとえば明治維新の直前にロシアからプチャーチン<sup>2</sup>が「ディアナ号」でやってきて伊豆に停泊し、そこで「どうだ、ロシアとも国交を始めないか」という交渉をしていたところに伊豆の大地震が起こって、「ディアナ号」は津波で陸地にたたきつけられてばらばらになってしまうのです。当時の日本は鎖国なので、外洋に出られる大きい船は一隻もないわけです。プチャーチンたちは、「どうしよう、ロシアに帰れなくなった」と困っていたらば、そのもとの設計図があるということで、ロシア人の士官を指導者にして、伊豆じゅうの船大工を集めてきて、そしてあっという間に「ディアナ号」を復元というか、新たにをつくってしまうのです。プチャーチンはもちろんものすごく感謝してロシアに帰っていくわけなのですが、もうひとつ驚くべきことは、そこでロシア人に指導を受けて西洋型の船をつくった船大工が「ようし、こんなものはもうひとつ、自分たちだけでつくれるぞ」と言って、同じ船をもう一隻つくってしまうのです。この船は「ヘダ号」という名前がつけられているのですが、日本の海軍がそれから使うようになります。こういう外洋向けの船を日本人の船大工たちが自分たちの手で、いわば技術導入してつくってしまうわけですね。そして、この船大工たちは後に、日本海軍のもとになる勝海舟のつくっ

た伝習所の教官に採用されたという、そんな話も残っているのです。

日本の「蒼生」というものは、そういう自力、底力を持った人間たちなのです。これはまた太平洋戦争の敗戦で日本が無一文になって、そこからはい上がるときにも日本の原動力となった、そういう非常に大事な民族性だったと思います。

そういう日本人のブルーカラーの底力みたいなもの、それが『五箇条の御誓文』の第3番目の項目「官武一途庶民ニ至ルマテ各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメン事ヲ要ス」に表現されていますが、これは決して単なる言葉だけのお題目じゃないのです。そういう日本人のブルーカラーの底力をとことん知っていた三岡八郎<sup>3</sup>であるからこそ、自信を持ってこういう言葉を書くことができたのでしょう。

そして、それが第2番目の項目「上下心ヲ一ニシテ盛ニ経綸ヲ行フヘシ」につながるのです。起草者の三岡八郎が当時心酔していた横井小楠<sup>4</sup>という人が、この「経綸」という言葉を盛んに使っているのです。「経綸」とは、中国古典の中では“政治”を主に意味するのですが、横井小楠が使っていたのは、今の「経済」という言葉とほとんど同じ意味なのです。つまり、先ほどの『五箇条の御誓文』においては、一人ひとりの底力をベースにして、上も下も心をひとつにして、盛んに経済活動を行おう、という意味なのです。そして、知識を世界に求め、汽車を導入したり、ガス灯も導入したり、電気も取り入れたりして、そういう方法で日本を元気にしていこうじゃないか、ということが『五箇条の御誓文』の本当の意味なのです。

そして、明治維新当時の日本が、新しく近代国際社会に乗り出していくときに一番必要であったことは、まさに日本人が、日本民族が持っているそういう底力の特色をベースにして経済を自分たちで盛り立てていき、生産活動を自分たちが行っていく、ということだったのです。このことができるかどうかで、非ヨーロッパ国が近代国際社会にのみ込まれて従属した地位になってしまうか、

それともその中の誇りある一員になれるか、その境をつくったわけです。言い換えると、「上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行」うことができるかどうか重要なポイントなのです。それにかかっていたとも言えるのです。これは決して単なる西洋の受け売りではないのです。繰り返しになります、西洋の受け売りができるということ自体がものすごい底力がないとできないことなのです。その底力があるということを実感しながら、明治の人たちは新しい国づくりに自信を持って挑んでいったのです。

こういう日本の近代史を振り返ってみれば、今われわれは「閉塞感」だとか「リーダーがいらない」とかぶつぶつ言っているわけですが、もう一回「われわれが持っている底力って何なのだろう」というふうに振り返ってみることに、おのずと日本再生の道は見えてくるのではないかという気がします。

## 縁の下の力持ち

私が震災の直後にキーワードのようにふっと心に抱いたのが「縁の下の力持ち」という言葉でした。つまり、東北地方という存在は、実は日本全体にとって「縁の下の力持ち」だったわけです。今までは気がつかないけれども、トヨタにしる他の華やかな大企業にしる、その縁の下を支えていたのは東北の部品工場であり、それからわれわれの食を支えてきたのは東北地方だったわけですね。

それからもうひとつ、あの原発の事故があって気がついたことは、われわれがふんだんに使うことができる電力、これもふだんは意識もせずに使っていましたが、それが足りないとなって、われわれがいかに電力に支えられてきたかということが改めて表にあらわれてきたわけです。しかも、その電力の3分の1は原子力発電によって支えられて

きたのです。この原子力発電が全部一どきにとまったら、日本じゅうのエネルギーはどうなるかということもわれわれは今思い知らされているわけです。

「縁の下の力持ち」というのはありがたいと同時に、ある意味では怖い部分でもあるわけです。言ってみれば、地面というものの自体がわれわれの「縁の下の力持ち」です。ところが、その「縁の下の力持ち」がちょっとしゃっくりをしただけで、あれだけのものすごい大災害になってしまうのです。

それから、「縁の下の力持ち」だった原子力発電というものが、また同時にいかに怖いエネルギーだったかということも改めて思い知らされているわけです。もう一回われわれは「縁の下の力持ち」の実力を怖いところ、ありがたいところをひっくり返して再評価すべきところに立たされているのではないかという気がします。

## おわりに：「ものづくりのチカラ」の再評価を

われわれ日本人は、ものづくりの力という「縁の下の力持ち」で戦後を盛り立ててきたのにもかかわらず、「もうものづくりは古い」「これからはマネーゲームだ」と突っ走って、平成のあの暴落、大没落が起きてしまったとも言えるわけです。

そうすると、われわれがこれからはすべきところとしては、もう一回われわれの民族の力であるものづくりの力、それは決して一部のエリートが担保しているのではない、日本国民全体が持っているその力をもう一度再評価し、再認識することではなからうかと思えます。震災後の状況の中で、前向きに考えてみると、そういうことが言えるのではないかと思っております。

### 【注】

<sup>1</sup> 堯帝や舜帝のような聖天子の恵みが天下に行き渡っていることを風雨にたとえていう語。転じて、天下太平の世の意。(三省堂「新明解四字熟語辞典」より)

<sup>2</sup> ロシア帝国の海軍軍人、政治家。

<sup>3</sup> 福井藩出身の新政府参与。『五箇条の御誓文』を起草。別名・由利公正。

<sup>4</sup> 熊本藩出身で、後に福井藩の政治顧問、明治維新後には新政府参与。「維新の十傑」の1人。